

「常広城について」

日時：平成 29 年 1 月 21 日（土）10 時～

場所：北鹿島公民館

講師：鹿島市生涯学習課 加田隆志さん

今日は、「かしま再発見」の一環として、「常広城について」というテーマでお話させていただきます。私は地面の中から出てきたモノを研究する考古学を専門としております。地面の中から出てくるモノには一切嘘はありません。もし間違いがあるとすれば、出てきたモノを判断する人間が間違っているのです。出てきたモノに間違いはありません。日本の歴史は、文字で書かれた資料をもとにしてつくられた歴史をベースとしていますが、史料にはうそや間違いや誇張が含まれています。そこで、考古学でわかったことで間違いを正してみたり、文字では分からなかったことを考古学で補ってみたりしながら歴史が作られていると思っていただければよいと思います。



講演風景

現在の北鹿島小学校が常広城の跡に建てられていることはご存じだと思いますが、どこまで広がっていたのか、お城の中で殿様がどのような暮らしをしていたのかは全くわかりません。そこで、城郭の全体的な概要、構造をお話して、後半で、昭和 62 年に北鹿島小学校が改築された時に行った発掘調査について、お話したいと思います。

常広城を語る時には、江戸時代ではなくて、もう一つ前の中世にまで遡らないとお話できません。戦国時代末期、北鹿島には常広城、森岳城、横造城の 3 つの城がありました。いずれもが戦国末期に造られた城郭です。

当時、藤津郡は島原を本拠地とする有馬氏が支配していました。竜造寺がいる佐賀平野を攻略するために、まず佐賀平野の一番南の端である鹿島を攻略して、ここに拠点を築いていたわけです。なぜ鹿島が一番大事か。有明海の奥に佐賀平野が広がっています。昔はお米が一番大事で、お米がとれる土地をどれだけもっているかが勢力になります。島原の有馬氏は鹿島を治めることで、佐賀平野に攻め入ることができるわけです。逆に、佐賀平野を治めている者からすれば、鹿島を抑えることで、北上してくる敵を迎え撃つことができます。そのため、鹿島は非常に重要な戦略拠点だったのです。

そういう中で、常広城がどういう歴史をたどってきたのかを年代を追って話したいと思います。

天正 4 年(1576)に、竜造寺と有馬氏との戦いが横造城陥落で終わりを告げ、有馬氏は島原に撤退していきます。その後、竜造寺は、それまで有馬氏に付き従っていた藤津郡の武士を自分につ

けと口説き落とすわけです。その時、常広城に鍋島信房を据えて、この辺りを抑えさせた。その時から常広城が地域の中での重要な拠点となっていくわけです。ただ、記録には常広城という名前は出てきません、浜城という名前が出てきます。これまで浜城は浜にあった城ではないかと言われていたのですが、どうもそうではなくて、浜城というのは常広城の事であろうと今は判断されています。当時の海岸線は常広城の近くにあり、常広城はこの海岸を通る船を見張ることができる重要な戦略拠点でした。天正4年に信房が常広城に入るのですが、天正17年に記録の中で城郭のことが出てきます。この13年間に、江戸時代の常広城の規模くらいまでには徐々に整備をされてきたと考えられます。慶長10年(1605)頃に作られた『慶長肥前国絵図』というのがあります。この中には、藤津郡唯一の城郭として、常広城が記載されています。

これが大きく変わるのは、慶長14年に鍋島忠茂が知行地をもらって鹿島藩が出来てからです。信房は高来郡の神代に移って、代わりに忠茂が入ってきます。それからは常広城が鹿島藩の藩庁、いわゆる藩の役所という機能を持つことになります。それまでも、行政的なことはやっていたでしょうけれど、メインとしては戦略の拠点というのが大きな役割でした。城郭はいろんな機能を持っていますが、戦う時の根城という機能に加えて、藩の役所、あるいは藩主が住む場所など、いくつかの機能が常広城に求められてくるわけです。

次の大きな契機が慶長20年の一国一城令です。江戸幕府は一つの国には一つの城しか造ってはいけないと命じます。佐賀藩全体が一つの国なので、鹿島藩は一つの国とはみなされません。佐賀城だけが城郭で、そのほかに小さくても城郭であってはいけないのです。館(やかた)はいいけれど、城郭であってはいけないという形になりますので、おそらくこの一国一城令が出てきた時に、城としての機能を常広城はかなり失います。具体的にいうと、一つは堀です。常広城は内堀と外堀という二つの大きな堀がありましたが、おそらくこの時に堀が埋め立てられている可能性があります。もう一つは高い楼閣を持った館は造ることが禁止されます。当時の常広城に、高い楼閣を持った建物があったかは分かっていませんが、もしあったとすればこの時に取り壊している可能性が高い。藩主が住む館、そして藩の行政を執り行う役所としての役割が、この時から一層強まっていくことになります。

次の転機は、寛永20年(1643)に直朝が鹿島藩主として入ってきたときです。2代藩主の正茂は本藩との間でいさかいをしており、7年間くらい常広城は放置されていました。直朝は本丸には入らずに、二の丸の中に入ったり、森にあった別の屋敷の方に行ったりします。それが変わったのが、承応2年(1653)に森の館の建物を本丸に移して直朝が入る、ここから常広城が本格的に鹿島藩の館として動き出すという形になっています。

それから文化元年(1804)に、あまりに水害が多いので、本藩を通じて幕府に願い出て、常広から高津原に城郭を移します。それまでは常広の城は鹿島城、正確には一国一城令以降は城郭ではなくなっていますので、鹿島館(かしまやかた)と呼ばれていたと思いますが、鹿島館が高津原に移って、この場所が古城(ふるしろ)という名前と呼ばれているわけです。これで常広城の歴史が一旦閉じるというのが、常広城の歴史の流れになっています。

次に、常広城の復元ということで話をさせていただきます。常広城については、いくつかの根拠となる図面が残っています。

図1は福岡市博物館が所蔵している「鹿島城図」です。中央が本丸で、現在の北鹿島小学校になります。よく見ると、入り口が南と西に二つあります。正面の入り口は南側です。そこから南に大手道、太い線で描かれているのが道です。左にまっすぐ行くと、現在の本町になります。入り口の右側には、勢屯、これは武者が勢ぞろいしたりする広場です。左側には、御馬屋、修理方、馬を飼っておくところや、いろんな道具の修理をするところがここに 있습니다。さらに、古学館、今で言う学校があります。



図1 「鹿島城図」(福岡市博物館蔵) 上が北

中央の本丸の辺りにもう一つ大きな枠がありまして、この枠とこの枠の間、ここまでが内堀になります。相当広い内堀の区間があるわけです。ところがよくよく見ると、内堀の間に小さな2本線で書いたラインがあります。これは川です。おそらく、もともと大きな幅であった内堀を埋め立てて、田んぼになっているわけです。田んぼの間に細い堀ができています。ですから、この絵図が作られた時には、内堀はほとんど空堀状態になっていた。ここに、馬せめ馬場田ひらきと書いてある。要するに、田んぼになっている。田んぼの一部を開いて馬場を作ったということです。

本丸の周囲には鹿島藩士の屋敷がありました。それから永泉寺や天神社といった寺社もありました。

鹿島市民図書館には「鹿島村図」という絵図があります。これは明治末期から昭和初期頃の絵図で、常広城時代の地名が出てきます。この絵図でも、南北に延びる太い墨線が描かれ、土居があったことが示されています。この絵図が作られた時点でも、土居は残されていました。実はこの土居も、城郭を作る時に作られた土居の一つです。水害を避けるために造った土居なのですが、現在は残されていません。

鹿島市民図書館にある「大字常広全地図」では、御殿、西小路、東小路、大手小路という地名が確認できます。中を通っていた水路や、外堀のラインが田んぼの区画として残っているのがわかります。それから内堀のラインが残っているのもわかります。

地籍図を加工したのが図2です。外堀と内堀が明確に浮かび上がってきます。「鹿島城図」にあった施設や武家屋敷もあてはめてみると、誰がどこに住んでいた、何があったということが、実際の地図の中で置き換わっていきます。ここまで来ると、あとは現在の地図にこれを落とし込むだけということになるわけです。

1948年に米軍が撮影した航空写真があるのですが、それには外堀のラインと外堀の内側に土塁が築かれていたことも見てとれます。戦後間もなくまで、常広城の痕跡は残っていたのです。常広城の遺構が壊れたのは、かなり近年になって、戦後の土地改良とか、宅地の開発とかで、全部なくなってしまいました。

北鹿島小学校と常広城の本丸を

比較すると、北鹿島小学校の校舎と運動場が本丸にあたり、体育館は内堀があった場所です。現在の学校敷地は内堀が埋め立てられている分だけ、本丸に比べて北側に大きく張り出しています。外堀はバイパスの国道辺りくらいまであり、東側の堀はほとんどが今は田んぼの中で、痕跡は残っていません。皆さんが想像しているよりも、常広城はかなり広い範囲であったことが分かるわけです。

外堀の内側には、鹿島藩士の武家屋敷がありました。本丸が高津原に移った後は、武家屋敷はどうなったかという点、どうも畑になって、いろいろなものが耕作されていたようです。それぞれの屋敷地も、それぞれのもとのままの所有者で、田んぼとか畑として利用されていたようです。さらに、現在は田んぼになってしまい、ほとんど削られてしまっており、遺構などは見つかっていません。

それから、写真1は北鹿島小学校の西側にある水路で、内堀の痕跡です。おそらくは城郭が移った段階でも、これくらいの水路しかなかったと思いますが、これが内堀の跡になります。

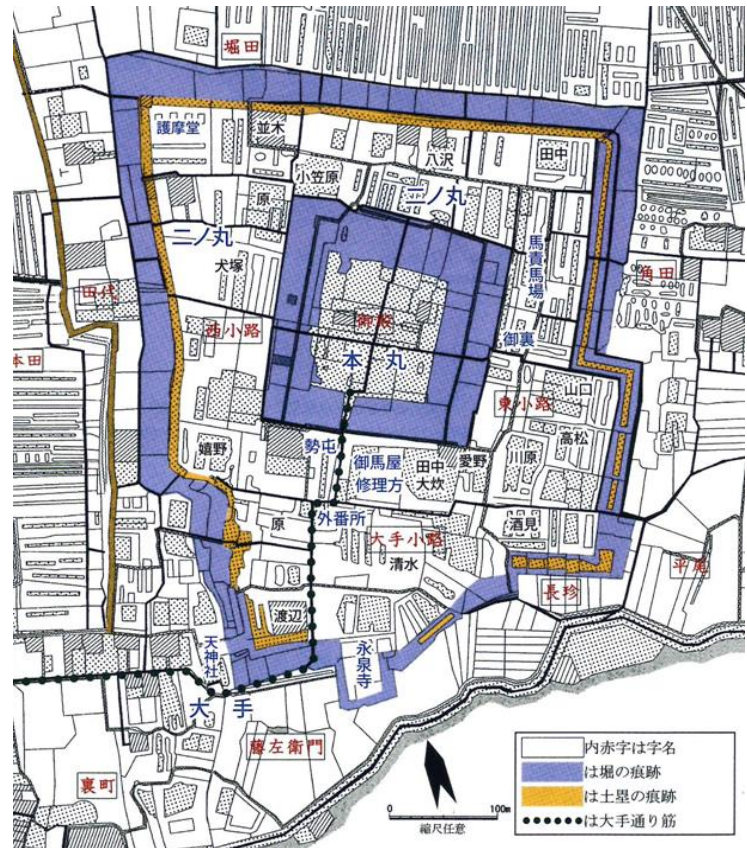


図2 常広城復元図

『佐賀県文化財調査報告書第204集』より転載



写真1 内堀の痕跡を流れる水路

それでは次に、昭和 62 年（1987）の常広城跡の発掘調査について、お話をしていきたいと思います。

図 3 は北鹿島小学校を改築する時に発掘調査をした区域で、図 4 は調査した遺構の配置図です。本丸内部の建物配置は史料が一切残っていないため、わかっていません。

調査対象の遺構からどのようなものが出てきたかですが、残念ながら、柱などの建物の痕跡は出てきませんでした。というのは、城郭を移した後に、この場所は畑にされています。おそらく畑を開墾する時に、邪魔な石などはどかしてしまったり、あるいは鍬などで掘り取って壊しているのです。地中深くまで掘られた遺構しか出てこないのです。

中心となる遺構は SX-01(図 4 の①)という大きな浅い穴（土坑）です。ここからたくさん遺物が出てきています。平たい石なども出ていまして、おそらく池の跡だろうと思っています。そういった大きな土坑が出てきています。

SX-05(図 4 の②)からは土管を使った排水路が出ています。P3~P7(図 4 の③)には丸い穴がありますが、石を敷き詰めた穴が並んで出てきています。ただ、間隔が均等でなく、また、つながるべきところがつながらなかったため、明確に建物という判断ができませんでした。おそらく何らかの施設があったのではないかと思います。SD-06(図 4 の④)には石敷きの遺構があり、土管の排水路につながっています。どうも、ここで水を受けたものを土管で流していた様です。

また、調査区域の南端にも L 字形の石敷遺構がありました。おそらく、雨落ち溝、いわゆる屋根から落ちた雨水を、下がぐちゃぐちゃにならないように石を敷き詰めて雨水を受ける、そういう石敷きではないかと思います。

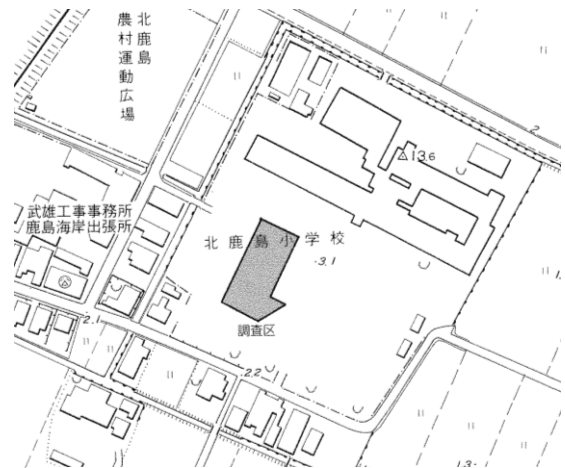


図 3 発掘調査区域(着色部分)

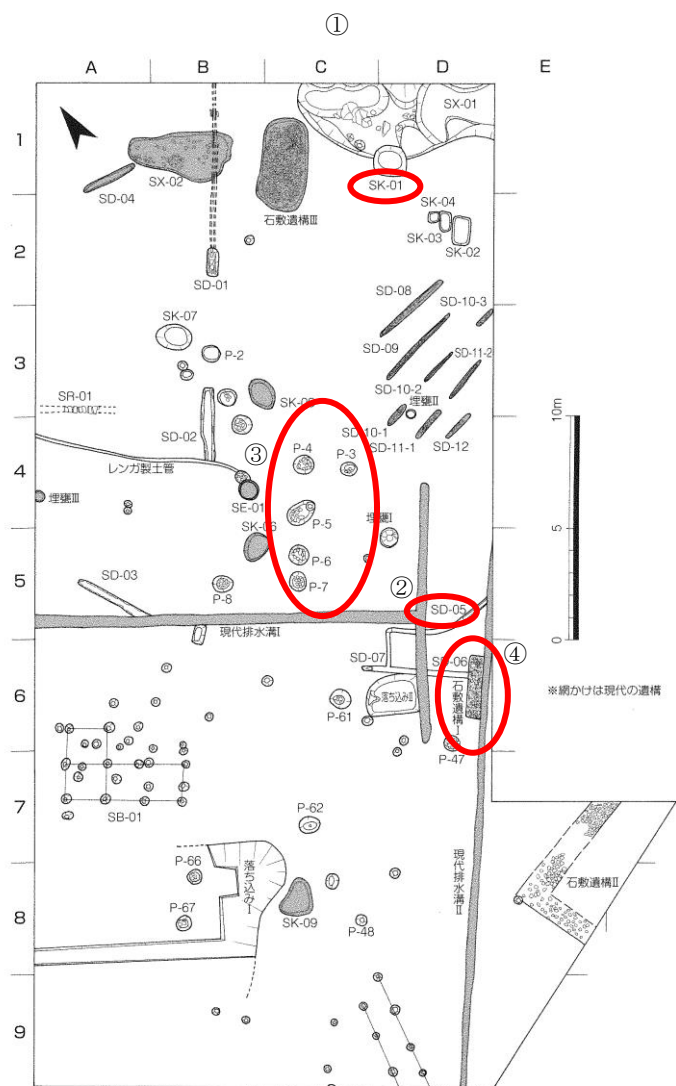


図 4 調査区全体遺構配置図

それでは、どういうものが出てきたか、遺構をもう少し詳しく見ていきましょう。

先ほどお話した池の跡は、深さも30センチくらいで、非常に浅いものです。中も、平面ではなくて、いろんなところが深くなっていたり、板石があつたりして、池だと判断しています。この中からたくさん遺物が出てきています。

なぜ池の中からたくさん遺物が出てくるのかというと、これは人間の習性といえます。江戸時代だけではなく、縄文時代以前から、人間は窪みにもものを捨てたがる癖があるのです。何でもいから、窪みに捨てたいのです。井戸でも、何でも、使わなくなった穴には、なんでもごみをほうりこんでしまうのです。わざわざ穴を掘るよりは、既にある穴に捨てるほうが簡単ですから。ほとんどの場合、溝の中、穴の中からたくさん遺物が出てきます。考古学は、昔のごみ穴を掘っていることも多いのです。でも、ごみ穴は大事で、人間が暮らしていく中で、使っているものは全部入ってくるのです。皆さんの生活の中で、ゴミ箱を考えてみてください。隣の人がどんな暮らしをしているのかなと調べようと思ったら、ゴミ箱をあさるのが一番速い。ゴミ箱を全部引っ張り出したら、自分の暮らしがだいたい分かってしまう。何を食べ、どんなものを買って、もしかしたらどういう性格かまで分かる。それくらいごみ穴というのは重要です。縄文時代とか古い時代になると、たいていの食べ物は腐ってしまって、そういうものは残らない。まれに、水が溜まりやすい湿地帯とか、逆に砂漠とかの乾燥しているところでは、普通なら残らない有機物が残ることがあります。魚や獣の骨とかまで出てきますので、何を食べたかというのがよくわかります。

排水溝は外から見える排水だけではなくて、地面の中を通す排水溝もあつたようで、最初は石で立てた排水溝を作っていますが、後から土管を埋めています。土管を埋めて、土管による排水を行っていて、その排水管が2本並んで出てきています。敷設した土管が壊れたためか、前の土管を掘り出さないで、その隣に新しい土管を埋め込んでいるのが分かります。ここにも石敷き遺構がありまして、これにつながるように石で組んだ排水溝、その後には土管で組んだ排水溝が出てきています。

上半分が削られている土管も多く出てきました(写真2)。もともとは地面の下に埋まっていたものが、このように上半分が削られてしまっているということは、上の地面がその分削り取られているということです。深さ的には30~40センチは地面を削り取られていると考えられます。もし建物の痕跡が出てくるとすれば、礎石やその痕跡です。この当時の建物は基本的には素堀りの柱穴は作りません。地面の上に石を置いて、その上にまっすぐ柱を立てます。それが礎石と呼ばれる石です。地表に出ているのは礎石ですから、上を削られたら礎石は残らない。ということは、建物の跡は残らないのです。これで、この場所から建物跡が出てこなかったのは、上のほうが削られてしまっているからということがわかるわけです。



写真2 排水施設

図4の円形の集石遺構(P3~P7)は、建物の跡かもしれませんが、こういうもので建てる建物

は江戸時代には少ないと思っていますので、何か分かりませんが、建物ではないだろうと思っています。

それから埋甕も出てきています。いわゆる水甕です。いろんな用途に使っていたと思われるのですが、下半分が埋まった形で出てきています。

それでは次に、常広城跡からどのようなものが出てきたのかを見ていきます。先ほど言ったように、ごみ穴から出てきたものですから、これを調べると、昔のお殿様の日常生活の一端が見えてくるのではないかなと思います。

今から紹介するもの以外にも、キセル、くぎ、銅銭、寛永通宝や食べカスの獣や魚の骨も出ています。だから、そういうものを分析すると、どういう獣だったのか、どんな魚だったのかもわかったはずですが、正直そこまでの調査は当時できていません。

出土品の多くは陶磁器などの焼き物の破片です。中には、初期伊万里焼や有田焼の優品や中国の景德鎮の磁器もあります(写真3)。こういうふうに、明らかに藩主クラスの人が日用品として使っていた食器、食事を作る時に厨房で使っていたいろんな焼物、雑器、あるいは使用人が食事の時に使っていたであろう雑器、そして藩の中での四季折々のお祭りの時に、例えば神様へのお供え物を盛るとか、お塩を盛るとか、そういう特殊な用途に使っていた焼物、こういったものが出てきました。

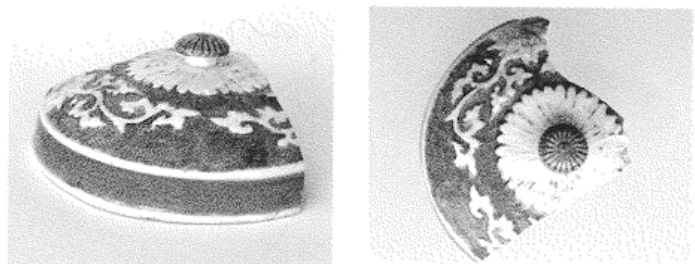


写真3 出土した有田焼の壺蓋(1660~1670頃)

厨房関係の出土品が多いということから考えると、おそらく厨房で使っていた藩主、または自分たちが使っていて割れたものを、この穴の中に、一括なのか、あるいは少しずつなのか、まとめて捨てている。掘った時の印象からいくと一括です。まとめて捨てているというのは、比較的短期間の内に捨てている。場合によっては、城郭が移転していく時に、厨房辺りで使い物にならなくなったり、ちょっと欠けたりしたものを、使わなくなった池の中に、まとめて廃棄していたのではないかと考えられます。

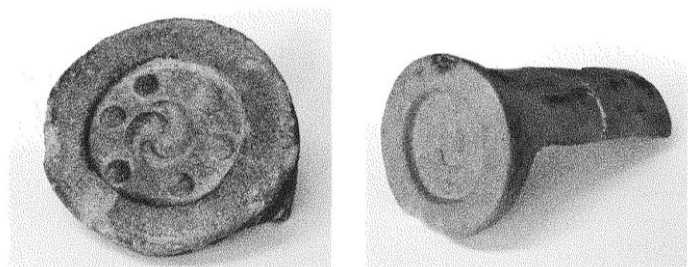


写真4 出土した軒丸瓦

それと、一番大量に出てきたのは瓦です(写真4)。瓦にもいろいろあります。

今、皆さんが家で使っている瓦は、丸い部分と平たい部分がつながっている棧瓦と呼ばれる瓦です。お寺なんかに行くと、真ん中の丸いところと、水が流れるところの平たい平瓦の部分と別々に作られており、本瓦葺きと呼ばれています。常広城で出てきた瓦は、棧瓦がなくて、この丸い丸瓦と平瓦です。そのため、もしかすると、屋根自体は草で葺いた、草葺きではないかと考えています。草葺きで作った建物で、そして下のほうの、例えば入口の玄関周りとか、そういう所だけ本瓦で葺いた建物であった可能性があります。出てきた瓦は本瓦と呼ばれる丸い瓦と平たい瓦、

こういったものだけですので、建物については、今後の一つの課題かと思っています。

おわりに、常広城は非常に広大な敷地を持つ平城であったと言えます。常広城は中世の終わりの、竜造寺と有馬氏の戦いの中で作られた砦的なものから始まって、藤津地方を治めるための重要な拠点として、内堀と外堀を備えた大きな平城として成立していきます。ところが、江戸時代に鹿島藩になってからは、城郭としての機能がかなり衰退して、内堀などが埋められてしまう。田んぼになり、堀の痕跡しか残らないような状態になって、しかも一国一城令によって、城郭としての機能をさらに失っていく。そしてそれ以降は、城郭というより藩主の住まい、あるいは鹿島藩の藩庁としての行政的な機能が常広城の大きな目的に変わっていく。

その中で、当初、城郭が作られた時は、いわゆる戦略としての城郭の配置がものすごく重要だったわけですから、水害とかはあまり考慮されていなかったと思います。ところが、後々になって、行政的な機能が重視され、外から攻められることがほぼなくなってくると、水害に遭いやすいという負の部分が表に突出してくる。水害で浸かってしまうという部分が出てくると、とうとう藩自体が耐えられなくなり、館自体を他に移すところまで踏み切らざるを得ませんでした。時代の流れによって翻弄された常広城の歴史が、こういうふうな中から見えてくるような気がします。

こういう城郭も北鹿島の中では重要な、大切な宝だと思います。常広城があった時代は、当然ですけど、鹿島藩の中心は北鹿島だったわけです。この北鹿島を中心に、いろんな文化、お殿様が持ち込んだいろんな文化を含めて、鹿島の中心だったということをご理解いただければよろしいかなと思います。

なお、本日使用した写真や図版は、常広城の発掘成果をまとめた『鹿島市文化財調査報告第18集 常広城』に掲載していますので、あわせてご参照ください。